風流志道軒傳

上

へ違18
1791
一-2

平賀鳩溪先生戲著

風流志道軒傳

松雲堂旧蔵

へ遠13 1791 1-2

明治卅年四月廿四日 藤井 氏寄贈

自序

夫馬鹿の名目一ならず阿房あり

雲津久あり李部羅坊ありしかれども

なりきりは安本丹親玉なり但同じ

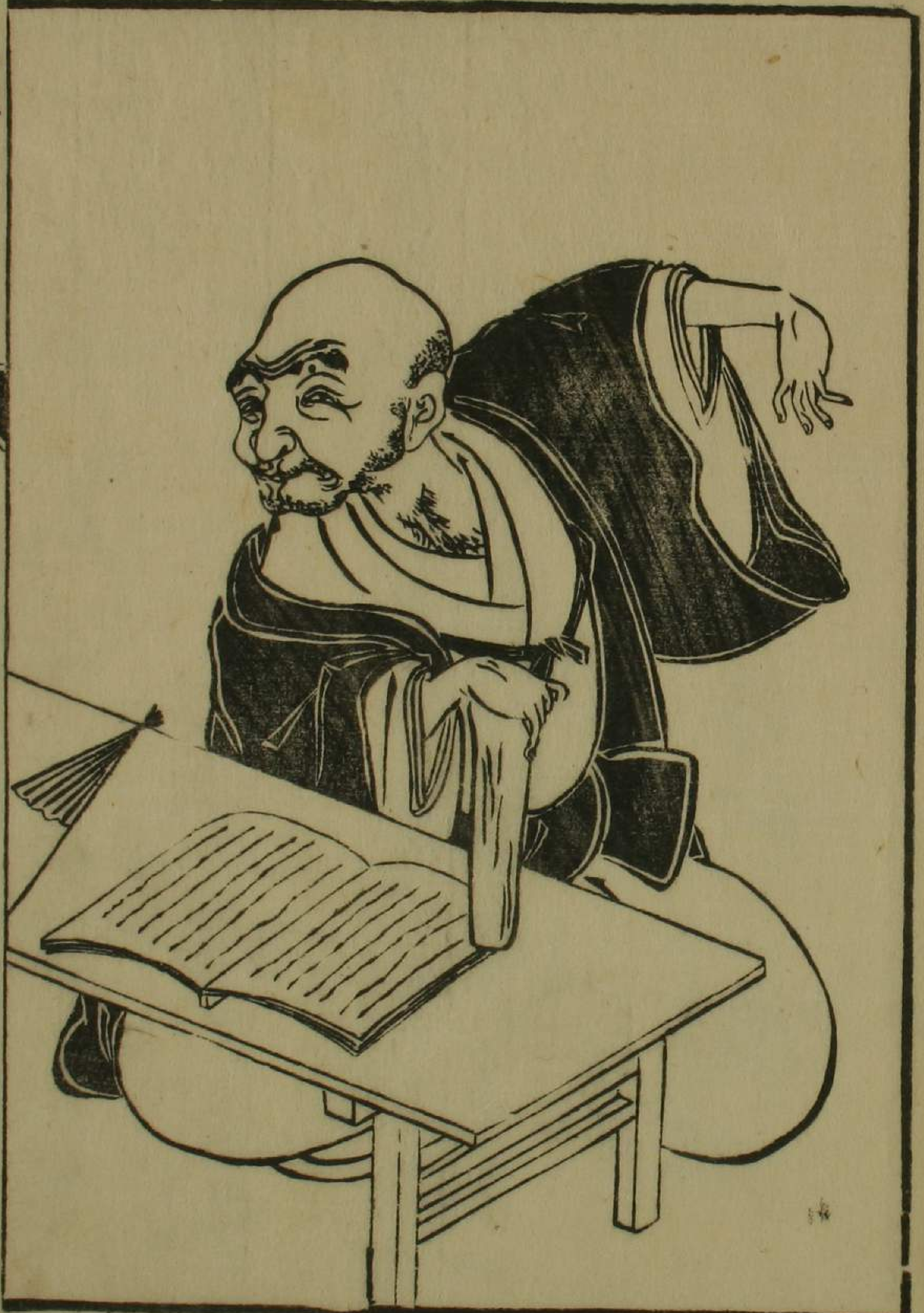
詞かはりて名かはりて同じく利

口なるといへバ人めつらかに称し立称

ど法有る愛与引なそうくて余ハけ年

同したハけなり京に志道軒といふ
大たハけなり浮世の人を馬鹿に
するが此不二(ぶじ)よりも高き名高きハ謀り
たハけの親玉となんいふべし志道軒ハ
なまどとちまき多和計に頷(かぶり)を振(ふり)
浅草此地内かゝ縁かくてなほ出る雲
津皇など日本樂人といふ数知らぬ世

小児てたハけと多ゝものなり家ゝに
遊く暗ぎのなとをかゝ此たハけなれバ
宮城が作る居士(いつさき)著安本丹から
すじなき文何ぞや或をれ書し
笑と画するは雲(うん)津(つ)皇(く)なきは梓(あづさ)
にちりばめんといふ厨所場あり玄シ
清書の所とて志かし清らしくて讀



このいつバかりもさて真のゑいけか
あらばく紙鳶堂風来山人一
名天竺浪人浮世ニふ子屋居ス
寓居ニ書ス

ちふるおもしろきさ
まことのこゝろは　我らこそ
世にいはされて
かしこ　志道軒

東京相州図書

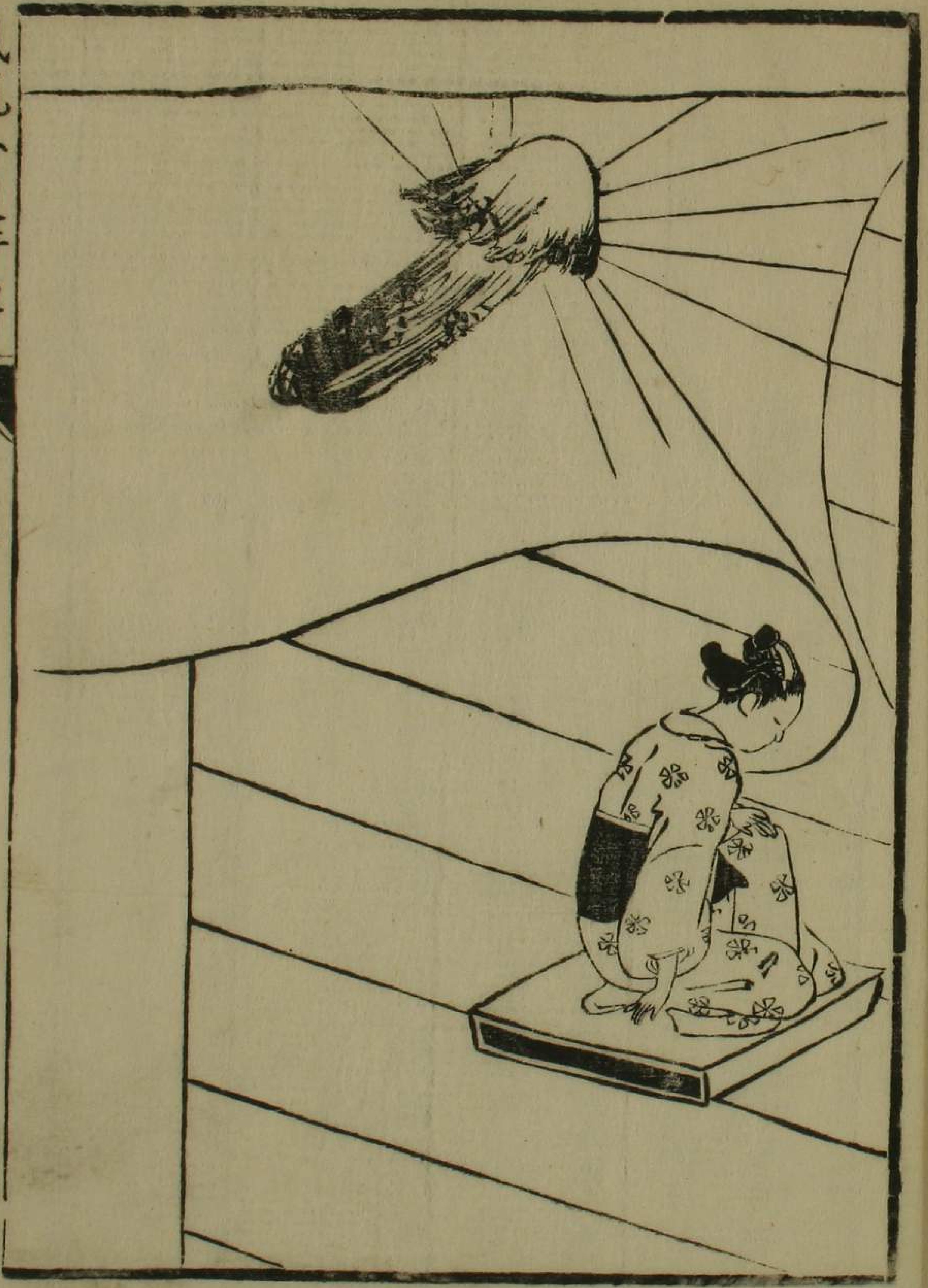
風流志道軒傳巻之一

爰に江戸浅草の地内に志道軒といへるもの有り軍談をもて人を群集なして作る松茸の形したるをかしにその机を打て諸人は癖を宗がへさする猥雑滑稽耳を抓て屁のぶに語ることを知ぬ迄はたゞひきまちさへ白眼うちあふけが鬱ぶらけある都ぬなり我らかくて此の世は人の味噌八百のめつほう失八九十年近きに癖教文にて女郎の身なりを見すてを顔を写しと徳に如をなりさる命しと続

藤井潔氏遺愛之記

こゝかしこ神まうでする旅人も千年と定たる子
へゆだりたる人々もとちぬの諱より幟画の扇しく
嚢を提ひつさげゆい紙の松竹くしりし紙製人の皮
よいなるべし或は鬼の蟹盃提燈なんぞ荒陰を
鉄炮のてうし浅之進七八歳の頃より寺入の初清書
手人の製作なれば闘に打続かさを子供もふ闘に言
思ふ年の角文字ゆがまぬも無用なる手跡と
芸をなくしまたも続くと大学は孔氏の遺書にて
初学徳に入の門も出るなれも人哉身立なくざりけり
ぬ生育にまさる生れつき勝れたれば人々身ほより酒

擲騎射鞭達の芸を年より八おとなしく見えるの
みは言もさらなり立花茶の湯蹴鞠楊弓詩歌連
誹を始として其余の芸能ぬけめなく十五歳に成
ければ父母悦こと大かたならず俳に打て耄る子といひ
又かく人に勝れて発明なる子は必短命なるものなり
其儘に成人させ二男三男の出来たるそれ幸なれ
ば病気にせば身も出家させば自長命なるべく且先祖の
菩提をも問せんことよしかくと告ければ父の好み事に
ねがはれども父母の命こそ従ふがたくとれより世この長短
ちやうれば光明院といへる寺を尋しけり　浅之進を



稚(をさな)きより家(いへ)好(ずき)て出家(しゆつけ)せんことのみハねがひけれども
父母のかく寵ふハ家(いへ)ふ縁(えん)縁(きん)なかりせバいよ〳〵
一子ふ家の奥(あう)儀を極(きはめ)て天下の名僧となして衆生
を済(さい)度(ど)せんことを日夜親(しん)類(るい)縁(えん)者(じや)の寄(より)合(あひ)ふも
濁(にご)る(?)律(りつ)僧(ぞう)の前の勤あるハまづ学問の外ふ余(よ)の事を
夜(よる)の習(なら)ひ(?)ハ常ふ(?)誘(さそ)はれてハ俗人のこと(?)を
さふ電(でん)光(くわう)石(せき)火(くわ)のごとしと悟(さと)りて此(この)ことバ(?)
こともなく人の身(み)ふあらバ寄(よす)がもなく持(もつ)ての中ハ
なげくことも(?)あやふくもて蓋(ふた)をもて集(あつめ)てそ
人の心あんめりと独(ひとり)竹(たけ)庵(あん)のことふ日ぐらし

むかしハ見ぬ世の人なりしことを四方のさまべ
ふ至り幾(さざれ)さゞれ(?)石(いし)の机の前(さき)ふ
ならべたる経(きやう)の類(るい)を見ひたく余(よ)念(ねん)もなく机ふ
向ふ燈の窓(まど)より閏ふ飛の法く机(つくゑ)のうへふなる
遊(あそ)ぶ進ハ我ハ初ば燈の落(おち)んとする折ふあたりて
閏ふ設燈(とう)机のうへふ卵(らん)ひとつ上(うへ)落(おと)して
飛(とび)来(き)り遊(あそ)び進て卵(らん)ハこれと巣(す)をなし
とふ閏(ねや)ふ二(ふた)ツふ破(われ)て中より人の形(かたち)のあらはれ
出たる若(わか)竹(たけ)ほどの大(おほき)さが竹の中より出たる
赫(かく)奕(や)姫(ひめ)の話(はなし)ありとおもひて見る内ふすゝ

と云ハ夢ふありけるまさりて忽(たちまち)仙術の人ふなりて
其形のけだかさいはんかたなく世ふ類なき玉の顔緑の眉(まゆ)
三十二相の形を備浅之進ハ見てさへ心を結合めハ
ことふ浅ける蕤らざるく彼女子も手てまづさと座ふ
立出顔(かほ)くの浅之進をさしまねく浅之進も座をおり
あちらけふ彼女子の後をめづきへいらこまづるに假山(つき)のあ
たりく步み行(たちもとほり)に桃花の下石なんどのあわりて
其中ふ小さき穴のありけるが其穴の中へ彼ひ行から
は穴よりも見ゆる時ハまづる五寸の穴ありけるが
行時ハまう人の身も尾ふ至り程の穴をぞ如くり

行てこ十丁ある所ふなれバ手ふ寄ふして大鏡の
あるあれいの門の生えさくさなく此本茸生ぜけり
梅ケ枝ふ赤儘ふ登れバかくへ二京卯の花の垣根(かきね)
いと白く其おふい子規(ほととぎす)のたよりが聲ふ鳴小男(さを)
麻(あさ)の葉ふ出ハあり川瀬さむく千鳥のなわれみてく
雪は涼しく寒もあり四時の花實時節にも
ろひ秋の色を事をかるてハ行ての其を手もそと手清く
たけるさまかたへ歩でもとありしてれより逍遙行
ハ宮あるる白ひの薫(かをり)来く管弦(くゎんげん)の音ハ此里ふ
流く玉紙ハかざれる樓閣(ろうかく)たかり金銀の砂を敷波

し瑠璃(るり)の階(きざはし)碼碯(めのう)の欄干(らんかん)までうるはしくぞありし浅
之進は雲に乗りておりし鳳輿(ほうよ)しづまれば彼宮女
かくと申して先に立歩むともなく廊下(ろうか)を伝ひ
行く一間なる所へ請じ入けり数多の宮女立かはり
茶の給仕して様々の菓子なんど出しけるが
何ぞと問へば卵(かいこ)の中より出る女にぞまゐりて
うちなるにいろいろの繍(ぬいとの)していときららかなる衣類
をかざりたるがかゝりの器で出る物は酒肴の数々
美盡し流しし今様をうたひかなで舞て
美なる女は来りて手拍子にうたひさすらうて

なるぬことなかりし浅之進は興(きやう)に乗じていとど
酒すぎしてかの宮女の膝(ひざ)に枕をしてしばし
とろみけるが暫(ちやうらく)して目を覚しつくづくと見れ
ば今まで有つる宮女の姿も酒肴も宮殿(きうでん)もなし
梅も桜も見えけるがまづ見れば松柏(せうはく)の枝を
荒くも岩にふるる流水(なかれ)の音はるかにして寂絶し
寺内の軒にもたれし梅に狐狸(きつねたぬき)のために取すてられ
しかも惘然(わうぜん)として我からず一寝ふたたの雲
下りて中にもあゆみし紀伊国女の表にあさく
衣とし頭には巾(きん)かいたたるに藁(わらくさ)の枝を持き

大なる羽扇を持て浅之進をさしまねき○紀ハ善哉〳〵
汝が聡明なるを知りて予仙術を以て招寄たりかし
とはいへしかも凡からずとて愛子を見れバ一般なれど
なかなか愚人めけれども顔色玉のごとく年の比
三十ばかりにて鬢髪黒く髭長く眉の中さわやかにて
威ありて猛からざる姿なれバ浅之進ハ覚えずぬかづきて
是ハいかなる仙人ぞと問。汝元来生れつき凡人
に勝れたる事に父母の法にまかされ出家させんとする
事今ぞ泥中へ抛がごとし我が教へんがため汝
が家業に○けれども佛法ハ寂滅を教として地獄

極楽なんどゝ名を付て愚痴蒙昧の嘘誑を教る
方便にして智ある人ハ導べき教にもあらず
人ハ陰陽の二ツを以て形となす譬へバ云バ合とき
ハ合て出生ずるがごとし火の薪にうつる内ハ人の
一生のごとし火消る時は陽ハ天に帰る火の炭ハ残死骸
なりと悟る時消る火地獄一つも極楽へ行も渉ばか
我説を語バ地獄極楽もなしとて浅之進手を拍
て大に悟て日頃先生の教を受し是迄の迷雲晴
として夢の覚たるがごとしやがて出家の志
止ミしとかれを人世の中にありて只楽をな

に打呆(くちあきて)ゐたりしに先生が前に業(げふ)とする所を
道を教よと願ひ仙人頷きて曰(よく)汝能聞
抑汝が家ハ弟の末にて生涯(しやうがい)を楽さんと思ふならそ
菅元磨京中の生れにて源平の戦ありしハ稚(おさな)への
耳に残(のこ)り徹て下治(おさまり)て鎌倉将軍路を東走(とうそう)ふし後
人太平の化(くわ)をたのしむ末(すゑ)ハ片田舎(かたゐなか)に長(ひとゝ)なりけるが後
思ひめぐらすに高祖ハ三尺の劍(けん)を提(ひつさげ)て漢(かん)四百
年の基(もとゐ)を開(ひら)き紀桐将監種なんくハ楚(そ)の
陳渉(ちんせう)が絹あり大小名をうちふ秋郷義旗
の驥尾(きび)に附(ふ)いて匹夫(ひつぷ)よりして家を起(おこ)すもの少(すくな)か

らずあらで治世に育(そだち)たれバ剣戟(けんげき)を所(ところ)んハ云ず
さかふの飛なり然バ藝(げい)をもつて家を起(おこ)さんと思ふ
志ハあれども世の諸人の藝を稼する業の湯ハ古業(ふるちや)
碗(わん)行ならなんどに手まハ流ひやして四角の気
流行(はやり)に追づから出ずり辺の茅屋(ばうをく)に流かむる大夫
の業(つぎ)手衍る流言ハ一瓶(へい)の中に千万百来の気を
あらわるといへども秋ある折射なりがて〇あてため来れ
多く自然に風景にあらず募を所ろのハならべて窮(きう)ー
たなじて並(ならべ)を習ふ百千年目のあなに出たけ人死てハ
西(さい)の泊果ハ行て一周年てハ文意し二周年てハ母慈ひ

は地蔵菩薩の袖にすがりて獄卒の棒をのがるゝ韓信
むかしやれ碁は兵の軍のかけ引ありといへども
孔明が碁盤をさしたる腕も笑へず今識に将棊
のよみに揉砕をらせて寒さもさば謡の謡に踏級
様ても先途生の胸倉をとらるべし香を焚きのハ
白雅とふりても給がむらち紀意ををるかめ沈香息
勝の極秘採極め蘭香書録紀とも好むも之
が二条の義六ちんどく文盲第一の名聞を喜
ひす行接痛とし楊弓ハ面射も百中たりとも
嵐がする兄亦とおりて鞠がとるおりとて後の滅る

とまゐして色よき狂言尽るよりおかに能ありしとへ八
の色人が女郎の尻に敷かるゝが身はさらに紀
さわ吹出しても踊に踏出る男ぶりおかしの段
かくとれバ歯のぬけるだけの損あり鼓のヤツハア
太鼓のテレツクスツテンくらんとよふ如おふやく
をも尽くぬけるの弓まで名の不朽に残べし紀に傳
ぞ其外謡の藤も言たる智者小咲の鐵あり其人の早べ
れい学問と詩おそる書画の外に出ぞ見さん数行の紀
時は迂儒学究とさげ上下とおもて井戸をさらく
ぶ吉が薩摩芋焼唐の夜店に立たがらのでそうあるが

不自由にならぬ愚癡の出来るゆへに角八角に喰れずつくもなし智恵無ければ却てせゝなみの者に手ひどくあたり是非なく腐儒といひすて屁ぷり儒者ともいふされば味噌の味噌くさきと学者の学者くさきはさんぐのものなりとて又無縁又饑たる先生たちは宋儒の頭巾をかむりて是へ出し卓見を角を直さんとて牛を殺すに宋儒は末の儒者には猪牙に家をかすてめぢやうの嘆きを好み心を摘ち唐音を家の世にもし時には上下を遅す昔の内におぼとあらためかするに陳陳の学者はかよし

是皆中庸を知らざると鼻毛をぬかるゝより起りたる病なるべけれ唐ハ唐日本ハ日本にて昔は昔今は今なり三代の上といへども礼楽ハ同じからず是を拵するが礼なりとて聖人の著されもせぬ聖人の道なりとて井田の法を行はゞ百姓どもに与ふ丹の私智にせられなんと思はれども不学無術にくいをともり行べき世にはならず只末学者〇仏儒人々より手の利ある太刀を二腰の鍛ひ刀鍛冶研たるに行かずんば大功はなし家もひろくまつらつらうばず讃合に思ひて人々の道理なきんと書店の潤に

身すぎのため鰻鱺泥鰌も同じ様にぬらりくらり
と世渡りつらく世を浪人にならずも身を捨ても
泥亀は後より下たる雲の他にはあり學者なれども名を
膺事を知らず如き様に拘るものハ條に進
事なきハ太江秩父ちんぷんの賢請僕なりとぞ
もきらずんハすれハたゞ者の儒士賢をいむと悪しくも
條和向作り来去絶なきに以下ハ自身白粉をぬりたく
狂言綺語の戯イヨ市川の親玉と誉められ而も
乙織小職より女妓ちんで百挽豆腐頁ばかりサツサ
ヨセくあぢてのかぶ嬈ぬらべらとして和なし讃論再

僕の者にならざればたちまちに追付らるゝなく種々のお
ぎり日に長じ風流ハいすゞの滑稽に返らぬ家を
用人身をやつすとさめるに及び薬缶頭で家持ある
て三人寄れバ文殊の智恵百人寄ても出ぬハ今時
さすがんからぬつくおしあげちかく守るの隠居は
かれずお出入の金集め揚銭に恥を知らずつて釈の
是ハ一の芸有道の学に今的にしてなどしる
譜代の家来を格式めつかち世ハれぬ虎の
威を借る狐狸が出来すればたちながら天下
のつかちらんこれ時代に流行ものハ坊主今

こゝち女の子云張ちうらうりたいこゝちの教なれば和氏(そし)が璧(たま)の夜光あるハ知らじと家にかくれより世を遁(のがれ)山林に隠(かくれ)木の実を食して縁を志の就けるが已(こゝ)にとかく仙術(せんじゆつ)を行ひ飛行(ひぎやう)自在(じざい)の身となり風に往(まう)するからぶちあれバ自(おのづから)風来仙人と号して五百余年の星霜(せいさう)を経(へ)たり今の世此風俗を知らしめんとを汝出来と止(やめ)ることを悩く芸能(げいのう)を伝ふるなれまゝ謀の及ぶ所とすることも却て俗人道(ちやうよう)ごれバ汝ハ世に捨る世を捨(すて)て畢竟(ひつきやう)の身から出るべけれバ只東方朔(とうぼうさく)が芸に滑稽(ひやうひやう)をなして人を道よく

近く俗論(たゞく)をとりて俗人の為すべしとハ能法を進(すゝて)進むみずから諸々先生の教を受(うく)志あれども家業にもして人情に精(くはし)からずバすゝめずしてかは志かるべき事ども風来仙人手に持し羽扇ひらめかして曰是ハ家仙術の奥儀を出して団扇(うちハ)あり柳(やなぎ)け団扇をたかくとぞげバ暑(あつき)時ハ涼風(すゞかぜ)生じ寒(さむき)時ハ暖(あたゝか)なる風を生ずる神なる人ばかりを求む山川を越ハ船にのりまで遊(ゆう)ぶ飛(び)ことをかくる身をかくさんと思へバ忽(たちまち)に見えざる奇妙(きめう)奇代(きたい)の宝なり是を以て天地の間を往来し諸国の人情を知るべし只人情の専要ハ気(きよく)を

事でもすれば浮世の色里なんどをも抜行すべし浮世
離るる内にて面白き事ばかりなり我教へし所へ
ければとて必ず若き者共に浮世が修行成就し
て再び出家へ帰し時また對面をなすべしさらばとて
いふ聲は様子に浅風の響浅之進は恍惚として光明院
住家の内に寐たるともなく夢の覚るともなく机にかかりて
ころのさとく居たるに側を見れば彼の羽扇中に
挿し羽扇ぞかりてぞ残りける

風流志道軒傳巻之一終

風流志道軒傳巻之二

浅之進は光明院に育てられ思ひめぐらす
に彼風来仙人が教の詞一ツとして理にかなはざる
はなく浅草寺に詣て浮世の縁識み
何出家の出家を嫌ひかざり錦繡羽が身にまとひ金
あげにも居に恋は浮説とて縁は異なもの戯生羽寺を生
の素性をあげしめんと極楽の底清水をも立寄
に説ちらせば見聞文言の同行どもいふ所の
如来様を経行し金銀結寳をあげ打ば法華経
手とかりて示すといへば豫ぞともの間にいふ縁

会(くわい)ニハ金もいらぬ雛(ひな)饅(まん)用(よう)ハすれども御の字でへ云
ハず打げ清て来れバ毛氈(もうせん)の上物(じやうもの)をくる
方ハ解れども御手ち巻(まき)藁(わら)ちかりおかさ無セ剥(あばらさへ)
むしかへし皆ちらりモ無暁の鉢をはこぶ人笑ひ
る振舞病をうくハ叩(たゝけ)ども砕かむようハ煮ずつきい念
御金持ちも金をハず請もちハ請まハず蟹(かに)結(ゆひ)家
髪結ず気毒ともちたへ喰ずとりわげ娘子が煮(うま)
ず風呂(ろ)焚(たき)ハ垢(あか)があらけれど風呂錢喰ひ笑(み)
壽も笑ひもらる医(い)者の宗臣生坊主の不信心者
よりして独り出家をと木のまゝからも出ず坊主(つま)ひ

あの角ひと面白ひあの面白ひあて場見たるありあり
椎茸(しいたけ)干瓢(かんぴやう)長芋(ながいも)蓮根(れんこん)南無阿弥陀豆腐(とうふ)の油揚(あぶらあげ)
みなくせまくらのあたらずれバ柔和(にうわ)忍辱(にんにく)葱(ねぎ)だらけすい
ものをかる子松茸(ころを)の雑煮焼(やき)豆腐(とうふ)鉄砲汁さて香の物大焼
饂飩(うどん)蕎麦(そば)生の米鮓ぎんなんら後の事の種子二
迦八切達このうつがん初午かけ雑煮(ざうに)自力(じりき)ののんを
始り捨(まて)合つらね女郎揚ひ妙法蓮華(れんげ)の闇(やみ)不迷(まよい)
弘誓(ぐぜい)の船挫四つの辻悪(ご)肉ものハ念彼(ねんぴ)観音力(くわんおんりき)刀(たう)
及(ぎやう)路々遍くどもおのまゝ一あの世のとあれバ女郎ハ
見え立ち蓬ちられなからん若みをうらむさかづれ哉

る薬師の瑠璃の壺入あんま揉〳〵と髭に夜
ぶし言ぬの月代まん丸な比丘尼の頭巾つぎ〳〵
の国より国に出入しけれどもおもさハやすらしをあれ
ども額の黒子の渋紙よりも眉に八字の寄て毎夜より
法ぬたる女郎は年用に守子ハ毎けれど読本郎に
ハぬれど一人をとゞまふとのぞなされバ世に繁に
も落ちふ〳〵落ぬこその二千坊ことも牛のさんぬま
落ちをもて落ちその八百十坊に康の角堅
まく見利時代の硯ふかく尖ハ足に落るひとふ記ちも
出艶くを独らその枝は熟に持して一ッを落

ぬるぞあかりけり たゞ人望生に守たりしを緩
の浦も今の子似たりとも浅之進ハ悟をさとりたかく〳〵へ
まて今に筆をとりて

のがれんと思ひし身はうらけれバ
さらに猶浮世にかゝる身の月

とかく遊んと障子に書付終仙人より探し得扇
ぎかり紳だつて光明院の思ひ出繁昌康
またもや元の浮と流れ仮べきをおんとおかしくさ忍よ
ひそうにけるが濁河臺のほとり小高き所にまそ
らある庵のかけるを言に整えの浮くはまたに

縁(えん)にかけり浅之進ハ庭におりて四方の景色
打ながむれどもことばに述がたく
或ハ霞にかくれ或ハ雲綱(けふかう)のたなびき
てさやかにて人知らず高楼に彼羽扇あらんと
見出し楼に登りて見れバ東ハ遥に少しに柳橋西ハ四ツ
谷東にて千住北の方迄もさしも広き江戸もくまなく見へわたり
さしも名の足音蟻(あり)ほども見えず宿(きやく)まで見えれバ初て羽扇の
妙なることを志り猶も一ト年のなりさまを見ん
と瞻(きろく)んと欲(きん)ずれバ忽ち気色かはりて此羽扇の風
さしも広く江戸の気ハいつかかはりて吉原となる

見るがみきに来りて程なく晴渡り御宮園の仏
なく晴(そらさき)をとらぶかけのあやしく鳥の花かふ
み渡りて東に横雲(よこくも)たなびき彼所に神田
野辺に出れバ彼神代の昔に立かへり猶も相の形
を志はしくとつみさり安らかに出しめ給ふ松
行餝(かざり)たるより行ちがふ人の数く多くの大小
名ハ何と晴(ちれ)を出立荘厳(さうごん)の神事風に吹ちらし
るの蹄(ひつめ)行雲(ご)の足を止たる数十里に並びたん
流けくもさら並屋かに下る先の礼おぼえかなり
公(おほやけ)のすハいとさらなり町ハ家く戸ざさして

いろまづかうにて追太夫の拍子面白く道
中にて三河の万歳まで返るがしたより風に
返る拍子を追て行振袖のなまめける手鞠歌
ここに居つらをかしらぬ道中双六と下男女入
乱れ福引の縁かけ鯛にはせ黄の発りかちなく
門口から居たより挑灯ぞ出れ太夫屋植木売恵
万歳屋鯛売の年始は縁起よく文字さん
とやんの締入る凧をなりなるでつちが言出
す扇子箱を礼に来べきゆかりなる深紙の似せ
達引まで論の先生夕アまで八備令にせちかれ外

落せぬ前に鏡に向ふめでたく祝ふて雑煮
の膳にハすりながら勝栗昆布を喰て上包
の書初て出来るごぼうをかぢつて手に年の始紙
一夜にかけて所皆まになる振舞のこころ今ぞ
おそろしくあまりなましいかし云を云八百の扇
羽門松飾り行の千代万代とことぶく元が根のなれ
あしらへと名にことに業なるも請合がよし言
借銭なき福なども気をかしき事をなかんぬれど
害なる行ハくろしらせ古人の詞なども一日の
計ハ朝にあり一年の計ハ元日にありとハ千金

汲く末をさかりがなきを紀をいひつけて神主ハ一きは
悉ん成設め悪しと思ふ事ハあらずとせしきさらくあるに
平けとにいへバ帝までが宝引し宣一の叙勅する事
となりて親くも宝引やら栂が数がつくゝやら馬
康律俣ふわればほえさもしふハあらぬ稀どと人くの好不
より坊も有紀理を付て稚時よりつゐ躍バ成人する
ふ従く出来男ある志子良遊戯淋蕩性ふ流くるなれ
是親くの跡屋生ちあらり二つ三つハ神芸を今ふ
の勢力ハ庵倉太鼓の叩ばひふあらハれ大夫元起
くるバしい幕のあきれ歩遅速ふ気合る拍子をたづね

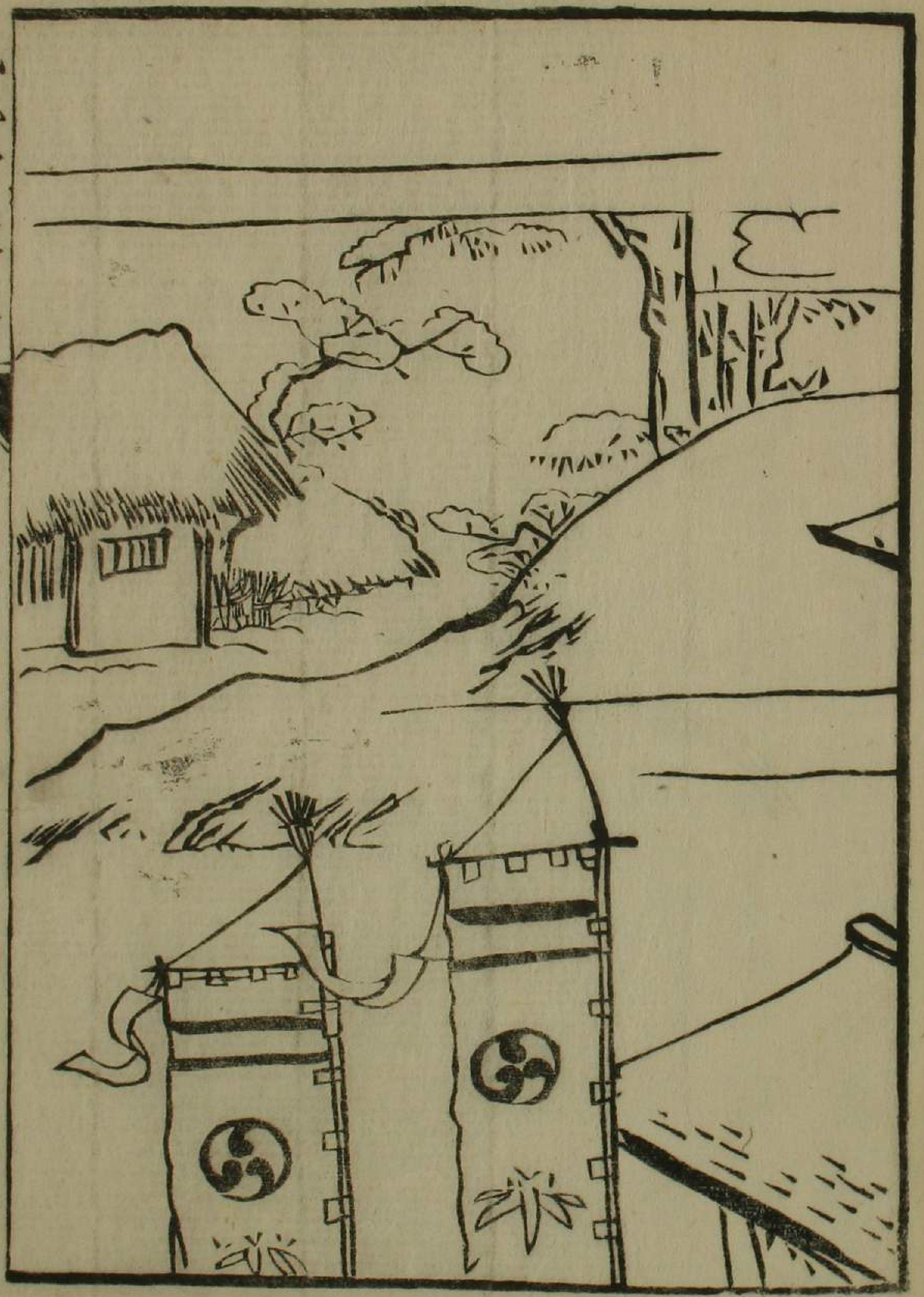
て離し紀八両程お七ふこれすぜし芝居がの宛
が歌詠くどふ云ハ徘ぞ其由来ハ芭蕉ん宗作者
浴洋の舟二十日から七るの縫ひ飯焚ふ笑出され
く七種の拍子が遠く帳とぢの袖ふハ雑が妻ふ
入りて浅を書坊と浴室が出し大里の跡がにり
とまの寺揺のが二十程ふみえるハとうけの方芸善
となんば破らくと糊ら忘れぬどう熟なく光
我ふ同じ日す我妻彦ら十ゑ員ハ縦引鞠杖鑼行
の煙ヲ子ふくんく行来るを立らぬ年云人を隠妓
入小袖の花やかなるふ裏の展の露語がかけ

ば風流の名ハ青楼のあり所なれどコリヤ一々
紙がきり込をいましいと狂気しいと云ふれぬ
世話やきの膝を遥かにさへて来る時分に至ふ
のら者をおさへる此月柳気色の縁合ある八重桜
はお客の嘲さまやうに東風吹雪の長閑なる
様なりさけ三絃の神なるぐいとゆかしく伽寸
さむ凡巾の数くハ見れバ緑どり垣根ひハ菖蒲
公英の花盛なるに濃の蝶の舞かれ出し涅
槃会の珠数袋に緑くり金の底の紙たてた
彼岸とへバ只だんおとのこ心をかし

お酒盛の参まめ紀て十代座のさりどよ
これやバ蓬の膝のおもしろくいやがしく寿命の人
みかり次ての始ま焼る百尼法師ま
で様のあり参ふまつる紀の田楽に焼の雛
子は絵く折出る参白も移り行山の花盛
に深草の流じ多れ降見は毛氈の紅道にたな
びき掛香の白ひハ見に引る法事の
りに縣馬の多くの声なる浄瑠璃の
ぎす一紀なき破の襁褓まくりと恋熟ある
参与に何ある様欅さんより八只夜ぞ来る

むれて衢ある所ふ酒旗かハしたるが舗ある奥
ゆかしさん也飲ても白き書方の朧月夜ふ霞ね
そのもとなく獨楽ハ椙枕ふいくたる夢ハ結ぶかくハ
去らバいざ花の都へ出んと思ひ立とふまてゆき
をかし浮繪風景の筆を離ふ江戸の田舎ハ浮ほと
りふも黄昏ハ立渡く大師河原の雨紀ハ
ひせて高輪ふて気うれさり酒ありて卯月ハ衣
更の声ゆの時もさ鯛松魚の黄昏ふさく
子規ゆくさ人ハ何処ぬく幟兜の気
色ハ黄色の雲ある出り粽菖蒲のあや

流れふ蒔繪の重箱ちやちやがひ夜の気色ハ
荷出したんど團扇澁團扇ありげバいよく言
荷ハ蚊やり黄ふ鵜の鵜たくはより五月雨の蛍
流るる浅草ふ仙蘇ふこと五月の氷
徒ハ二条の蹴鞠の足ふおぞて瀧立れバ麦藁
諸ともあぢ抱手かゞ疑れ蚊火の盛ハあき紙
照しあらバかくし人も地獄守をも意
気ての川星の手向ハいとほらしく琴の爪
音あれハ十五より盃茶盥の芸がら蓮
の葉ふ爪茄子ふ鷄気の入るふ哀ふ生る



魂祭(たままつり)には灯籠(とうろう)にさまざまくの品尽し、八朔(はつさく)の白妙
に錯落(さくらく)の衣の行粧(ぎやうちやう)より月見のさかりすかし(?)
よ流りの人がらにもまさる人形まはし、燈籠(とうろう)の趣向(しゆかう)を
うちならぬ本田組(?)の一むれがまけぬ気の河東
節、其の響(ひびき)は山彦(やまびこ)の杵(?)ちからも清見(きよみて)(?)は家皆
まがれよる船の内人々を浮瀬(うかふせ)に里神楽(さとかぐら)に三番
叟同出(?)衣(?)踊(をど)りまでいらぬ世を養(?)台(だい)の蒲萄(ぶどう)丹(?)葉(?)
から合せの羽織を着(ちゃく)(?)の芒(すすき)の中に有(?)同(?)はすれど
をも見せ(?)、翌(よく)の穂(ほ)に出る花車あつて、あまた者さまざまく
に秋(?)草(さく)月ともに九日の菊(?)後の雛十三夜は月見(?)

にまで両郭の風流を播(?)中菜(?)の盛(さかり)なるには帳場(ちやうば)(?)
の隠居(いんきよ)がれ物好みは様々(?)に同じ(?)趣の様子、芝(?)神明の生姜(しやうが)
市、玄猪(いのこ)十夜の時をこそなれば、御命講(おめいかう)、続(?)開帳(かいちやう)も
誰(?)とらぬ人やそものごとく恵比須講の百(?)万
歳の市人の寄(よ)(?)って飾(かざ)るもの先好みは年(?)
附き合ひは八方へ散り芝居の挑灯(ちやうちん)それぞれの紋
御非時(おひとき)(?)節解(?)のすそ長(?)くしく報恩講(ほうおんかう)の尼(?)
たくおの家(?)千住(?)ほど云あらくべるは切なくいこまり
あんどもるす扨て乙子(かとこ)の朔(?)日(?)より雪(ゆき)(?)[illegible]
どちらげくみぬりまりて風は身(?)[illegible]

あれバ窮屈くハ縮緬の巨燵ニ茱萸嚢の用心する
さくよふ袂の褄挿こみちらされ新しき袖裏ハ
衲を逆ニ挿むるがつくあれバ其の咎から見え
ふゆくらうるに至日といふあこてすさげ紀者花
くの葉ニ雪積もといへバすず雨にぬ東南をゆく
立さいだしよ見にいでなくざれ取ぶ掃撤する共
いふべき生うちや力つよさする者あんぞかかる
時ふき人肌をあらハし汗を流しすづらの僕ゐし
おの使えて下ざ女の世渡わ者人ハ老ひ去るかなしき紀
るふぞかかるてけて塚翻のちよじし紀布子の

よき單ありとも引かへて大事ならぬ道具あれ
どもかくる時ハ公家ゆへに蒲団にくるまりて手に抱きならび
て丹お乳火ハ屏風の内に鎮座ましくす持佛ハ半櫃の上ニ
来迎佛の用ふと立ども持つにとまりかかりしとかの
あんぞこそ渋紙ニ包込れ久ク客まはりし窓あるぞ
梅の花一より出るくと嬉しくますハ金道具を
おちこち媛らく撰じたうば家ら宝とるあんぐ
下部ハかが奴ハ小ずの合多のまみをすら記供養
て流道具停仕るさ風左あがら遣ら雨ハ九角
れざとからだささへれバよ見を端の底あんぞ

のおほく国中ことより流行て気のふれし一ものは思
ひをかしく追々湯に入て後細くこの人々に
ありたる頭みぞ光り浮身に磨も人の心も光り
る道ある人の足も頭から追手ある人をもかくも云なる
ばかり町々ふて豊島の山茶が座敷ほんおハらなど
杉ねやかやかちぐり法華宗の人だかり節季
おきのせ、しあて隠法師がかしま見たる中に
乾出会の年忘拳酒は九十日めつくに手を組
けてども銭を丈無しの西瓜国太平日までかゝり
はめてハ八人藝でさへ会ひリリヤ獅子を浮く

床に掛たるは湊紙膝ふ余る達磨の半身
目をむき出し九年面壁の居眠りおくハちく
てくまりず帯ぬきの一寸のかぶれは針ふ至ては思あり
と寄老ハさかしくも文増を鼻石あたがめシ
若衆の狗骨錦の頭を給ふからいへども至ふ
述る鬼あらハ来りさらともなき給ふとがさん
やく拂の西北海ハ十二丈の西瓜のわたる雑煮さて
那テふとあらじ西瓜紙吹てハ市れども
横の米をさらへ者にしふ数てハ市なれども
宝船に一般太工ともし出ひ付ふ形を画て手揺

まだかりの人居りなり一年の内ハ八千歳万化の世
渡りを汝が夢の間の事ぞ一字ハ演し人間の私に
住まどかれなりと汝ら道知翁をなぐれバ有し絞
汝が夢の庵の内に楚然し給の中こそ熟せる内な
りけれバ翁の妙を感じ彼風来仙人の
教にすがせ是より日本へと返に及び庵を出
より彼の名をまずでと足をそんぐらひ並らる

風流志道軒傳巻之二終

風流志道軒傳巻之三

天神七代の始め男女の道有ぞとなれバ男色ぞ
かりねたのしみて志かる座なる世界なりしが伊弉
諾伊弉冊の二神天の浮橋の上にしてめつうむ
志なに滄海を探りしかバ矛の先より滴瀝る
潮凝て焼塩なる是よりして加う浮世とぞ
なす始ける時始て合点せんとするに手術ぞ志らんど
ほりに鶺鴒飛来て尾を振ぞぱつく操を味はふるに
研極攄盈始の美の道をはじめりと今時らんな
世や夫なるすめらの行の古の事ぞ国に生ずる

白魚肌とは縫目の見へぬ風まで　いはゞ生る
ことの始は形あり形有て後は文字あり
て一天地自然の道理なれバ手を後の事とて
法がともなへ脊令ぐいは先生に表はれ
に淡々遊ハ駿河臺の庵体立は何人なる事あり
けるにかたへより駕籠屋後ふくの数多流し
て弁当なれバ詩がかり艶かなり男ちよこく来にて
追掛小なに醜く見形をまでやりせやふとなん
いふにん付く色事しれふ吉原のさんや堤の土手
なればもう手毎とおうなは浅草ふのお字はまう

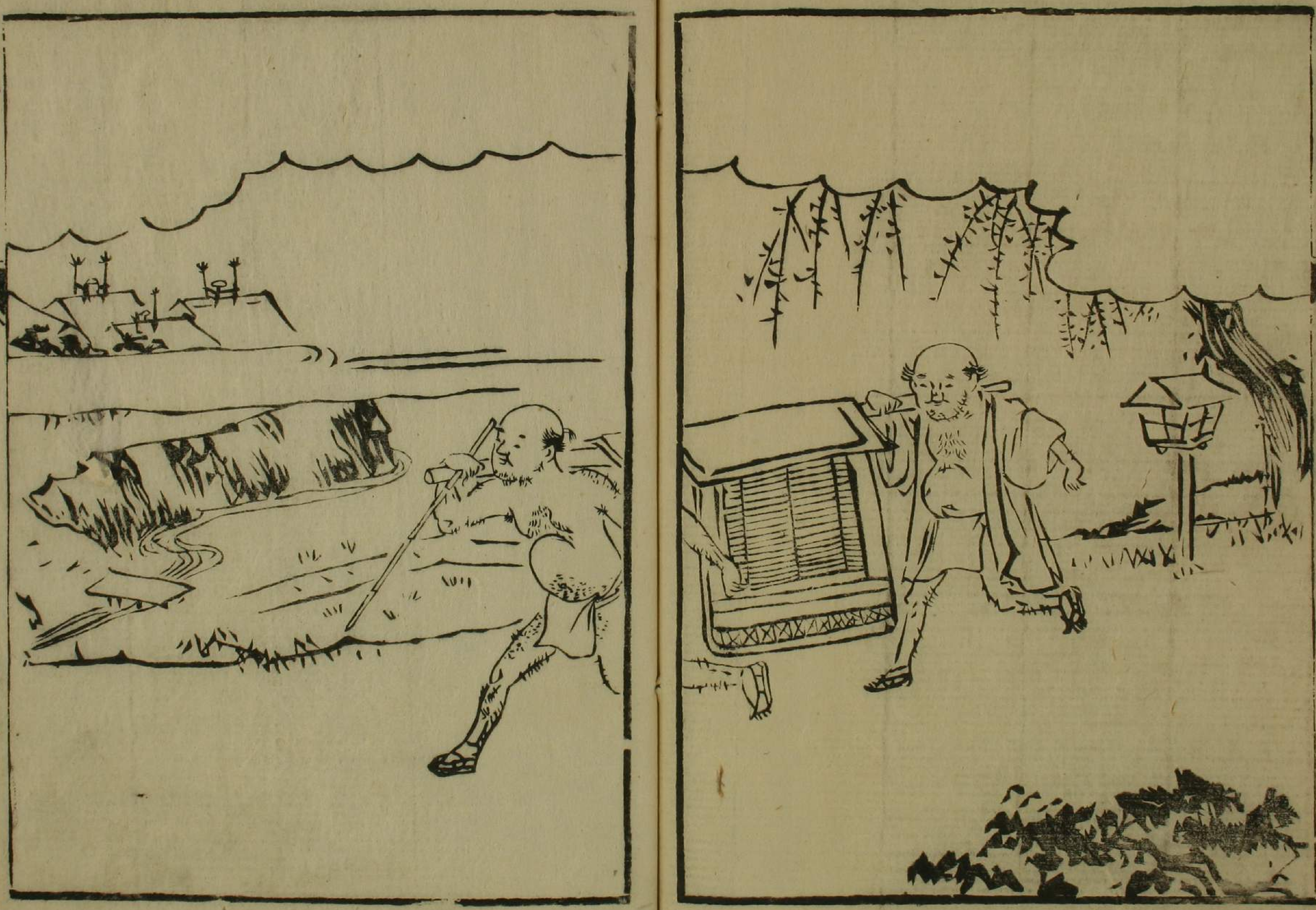
開とソレ捧組といふ者もなく駕籠するなかれ
よるコリヤサくの掛声ハさうさうるてゝ洋濤ゆらりくと
居眠の寐耳へきいる聲にも讀とよ顔ら淡る
をとる事あるもあはれ千里一走絲も綱に身を持の
駕籠よりをりて弁当なをいかし絞るに段
坂まづ気んへと中の町茶屋が内に居ければまだ婦人ハ
槌ぐるまのこととてなしソレおまへよ煙草盆なる神
その家なればどんなかか減ら白魚の吸ものに柚子の
匂ひいかいから称ずかより八百善う酒七一へ味よく香
主客様猫これ者にみせの出かと会は迄色の上

下の境(さかい)町(まち)までも浅草東仲町から新町より浅草
の鳥居までぐるりと廻りてすゞ町は揚屋の時と深
川と仕合せなりにて渡せば新かふ洲崎下総の吉
格子の内の姚は鹿よりも照(てり)がやける縫箔(ぬひはく)の伊達(だて)こと
やり被しただ大事に格気は思ひの胴からやと
ましは気あんで言う紐急りの白きふいてぶら髪
のつかみもおくゆかしく働くは思ず轟(とゞろ)ぢの
囁(さゝやき)合ふも心にくし人の心を引三味線(さみせん)のいとかし
ましくは思へとも恨るかうかれ男の人とともを
恨み寄の道路踊ちて浮乙女(をとめ)の姿あらんと

何れ縁ゑるもふくらむはなく又それゆゑと定めんと思へば
見れども子に思ひためのあさは同じのうちにひとりかゝるんと
偖は却てくそくにかなはぬ稼の一度縁の縁結(えんむすび)は出雲
の神は性何ふもさぞいかにかしくやあらん結び
晴続向閨(ねや)の振舞(ふるまひ)手にかけんたん縁りのとゆう
心うすちにいたそれは二度同じに返はせ裏(うら)返しとちん
いつがは塗工(ぬりやくにん)よりいひ出し奇かえると鞍(くら)がへあるとき
古詞をとりかゝるんめれども只縮緬(ちりめん)の詞に似たり二度
よりは三度三度よりは七度咲くに面白く顔に燈(がい)之
が甘露ならで漸(やうやく)佳境(きやう)に入たらば粋(すい)と呼ひ又

盛り者といふされバ女郎買と虎吹と青い肉が
器量ハ松が名ある世も能き世ハ吉原武蔵
男色を試んとてそれより堺町へむけ行ニ又
剣世の中の一風流今剣が桃灯ニハ名代の紋を先ニ
てらし大振袖のお織衣風ニ翩翻とひるがへり
尻し綿笠の肉でゆかしい紫帽子ハ羽織を留
ゆるしの色をちん人の出好ハ面の見あるがごとく
れハこそ権り長はうれどもそれぐの相手行るが中
ふとも平ならくの振袖髭の誼青さめたをてん
老笑を艶人色好の見あるもの白味噌ハとれども

大彼方のはえとのハ竹の子の和らかなるふらちかど木枕
所ふりて宮ハ身代ハ大根屑のごとく神明家の
後ろを東北金跡の長なんなむ湯嶋の広ハ
千里の用を極英町此向ハ藤よりもまさり也し
まさるとふて加をぞ町眼とする田の明神
みなあろれバ京の八情の了海神のかうり
さ咲の梅かんと麹町ハ麻なると云のむ
土毛の毛ぬ大橋より一つ目山猫ちんどが八九なが
ら化物の名ニとし菱の苗を取りけ紫の[illegible]
葉ニ不かハれバ不川の風流女護が嶋の辻番



かゝとは結る顔桜に似有馬(ありま)海(うみ)老川の近ん三やんと
夜さればで臍(へそ)のごとし和ぐ画に劣ぬ太鼓(たいこ)持(もち)の居つゞ
けふらで比叡丸の功を失ひ鮫(さめ)が橋へ走ては牧流ぬ
のみらみをうく鞘(こじり)の流るる謫(?)捧事(つきどう)借(さかつ)ら給ぐの
日本橋より千住(せんじゆ)といへば詠をめける万緑寺の豆爾
寺翔鮮(らうせん)もたの孟(いこう)もらされいろはちく名世話らた
人形引出したお玉が町八王子まねお能のさる紀之
味の素を出め此素ね町かたり明して夜を柱橋の末の
宮も赤城より晴(ひらき)日に逆(さかさ)小藪(やぶ)の下屋に足を宮しあり
芝露稲荷の祇より化ごとあしの市立系町 水の氷川(ひかは)

の宮(さむ)は好きなる処に猿若(ざるわか)町丸山は丸屋敷
新大橋のながくして千住まではよく又を一座
を出御座出る所は入の本町石場(いしば)に流くだ
けお後だし踏返(ふみかへ)したる丸太の名跡立てまさ
と鋳次第赤條(まんちう)偏(へん)にとられ店(よ)屋(たく)に投はあるれ
どもこゝろをとられてはすゑはひは哀(とひ)る気て一夫にいたり
急湖(かな)に去らりるの丸にかせて諸方あるなかめ三もせ
バ淋ら進ハみれよりも読出をめぐる根んせて龍の男
云するにもはうす五分手に送出立て行つて後の
の一人龍たくハへるけれバ浅草人の手掛となく

労れハ休ミて至すれバ行かふ旅の客宿屋
の出女がふすまもあやしき顔に葛とうどん粉の七分ほし
つけたり白粉ぬらまゝさらに斗ぬり顔ハまん丸
なる形容のちゃ帯にて毛匂へバ日の丸かとんだよふ
ふれ気をとちなつへ紀顔は出して立やべりちら
せバ大象も飽きもなき秋の蕭を必よされバ道中
宿屋の女をお袖ぎむれど名付しきいハれハ旅人を
家に泊らすもれふたへか孫る喉ふ伽にお袖ふれと
いへハまりくそ寝ふ来るなにちるとお袖ふれとなん
いへるお袖ふれかつのふハ来いとたらおまとはふのかく

来中ふれとつかふよりこそ見るかく饂飩なる詞あり
なりからなりまて業平東下の記を云八百屋にて見えたり宮川
大磯に油坂吉田宿渡二丁町吉原山田並
京に及ず浦賀下田の舟のり長崎丸山京南
ふハ纏掛かたの立種色の湊多紀中にを出口の
柳まで郭にても何の頭を祇園より祇園の気色
宮川町縄手に家ふりてとばかりて祇の段目は猪
会も絹来かくて石垣町あられぬ肉地北より
さつま紀ふ小世もるの隠ふハ薮の下あしでちかく
並み菜屋尻の方から折す大とならばより出

川淵(ふち)らぬ水の流る坂二条七条八坂のおくまでも撰び
手かりたいる風になびく柳風呂(ぶろ)壬生(みぶ)了詣ち御霊(ごりやう)の
おかの石垣のちくさにもきよし芦(あし)ハ難波津に今を春
べと盛(さかり)なる松梅の全盛(ぜんせい)ハ新町に色(いろ)香ありそへハし白人
藝子の名高めけるハ南宗風情をたつかハ花稲さみ香
招溶湊の内意坂町堀隠(のぞつの)(りく)ぐ出るいろは茶や
ちりぬる客をあり高る同じくの堀町ちうたなき
ぬ味の安治川に涼くもまりし堀江大通地の用に入る
は新地より永代意く秋明かり行ほど唐紀のど
町くと柳小路を見ハちよまり何ちとも一かかにハ

七里けんぱいハ新屋敷の難波新屋敷遊い娘
尼ちよろ(ちよろ)長田山浮(うきる)名をかぶる編笠茶屋宗右に居る遊(ちう)紀編(へんれ)
が茶屋立話尻くり合町ぜうゆうじ福ぜん寺く
に住寂(や)る殺の野高(えんさう)すまや堀に千ちよう(ちやう)より京らへれ
木津に近く浮くハ身代をたくき込挿木町から墨染の
花かゑ枝の柴屋町室(むろ)津の泊菊おのちちらい
からうとよの関引来(いきいせこいせ)のなまりにいさうとハ安藝の宮
島に太夫の全盛(ぜんせい)坂から指(さしくけ)られし釼(かさき)の渡せる橋におお
く下の関意に行先きらぬ大の湊しに擦に浦く鶴安(えくらく)
子に至るの紙呆屋(いうて)の人にとまれバ角のとれたる丸山にちんぷん

定まりたる宅のあるじへをはなれて一とく三〔?〕
越前敦賀今町今はより出羽には坂田かや
の湊は津軽に青森南部寺かく町陸奥にはあらや八
丁の関松前のほかしまで諸国の風景をながめつ
くせバ浅之進ハいざさらバ是より外国を見んと
て彼仙人より授し羽扇を以海中へ入らんと望し
けるが花なる船に乗るごとく蒼海漫々として
て浪を白なるの果もなくあれども羽扇の妙に
れバ海上すさしをつれぬるさす数日合ざされ
ぞとも艪すいつくともなく行ほどに漂着

着きければ羽扇を手にして陸にあがりそこよこゝ
よとさまよひけるにいと大なる家の見ゆるを見付て
ふしてたどり付バ浅之進を見付て多くの人出
るとみるれバ何れも身の丈わづか脊に似たる
子供形も同じ人よりなれバかへつて浅之進に大
人なりとぞ是へハ足一つ向に羽扇をかざすれバ先にまで
出し紙数なんど様々の仕方をつくしてかの風に
をはなざれバ浅之進仙人付て彼羽扇を耳に当れバ
大人の詞も委しく所にて聞とくバやすく会得
なるさまなりけれバ手にハ其ままに詞の無会釈八日本

の翁ありけるが語りけるに振く池竜に大人のこそ
あり二三百も経し昔遊山に出よし行衛ふ
家もなく人ごゝろ安からぬ芦簾にて四方をかぞへ
たる程屋の内へ住行庵のまゝに渉に遊ぶを家主
をかし紀形もし留古鞁のありさまのごとく指子に
生て日本人のみもとのをにのぞく言は指ありて
ける男が仙舟出し人とのこゝは遠方て生の由を
生ぐみせる法師に言ひ奏に帰りければ色男
女おし合せり合引をさきらぬ人群集し指ば
若女神渉に遊うるさく呂ひあるはちんと案じ

けるが家にてぞ彼翁あさんと天に命なく仙人は
ねし翁をゆくと見立バ小屋の屋根を法き破て
そも其するかに見されバ大人ども八月頃に答ぬが如
の向に居て日本人の為に仕する事皆及ばず是ハ
言て日本に住出ある宝物なくてならんと云ばされ
バてぞ翁を搦り去かし舟ハ小さかりし
是ひくの風浪法一人の大人が曰法宝呂る宝物あれ
バどうぞその里にも舟を蔵したるにぞ是ん
讃言しても浮浪ず来りも渉に遊ハ翁に先
かせひたりけるがすぐに鳴の見えければ手にへぞあり

なりけるは爰ハ小人嶋にて人の大きさ一尺二
三寸なれば一人歩(あるけ)行バ鷲に取て喰ふ故人連(づれ)に
てありければ此國の者は小さき者にてありければ浅
之進をとらんとて多く甚おのゝき戸を閉て出ざれ
バ浅之進ハしばしありける内に奥へ行程
更に人小く五寸三寸の人ありけるが奥小人嶋に至
れバ其大さ雛人形程もありける所を通れ
の宮ありてさしも奇麗(きれい)に作りたる城あんどの
都にて大勢の小人どもを出城下城の躰を見ら姫(ひめぎみ)
さんと鱟(けん)害(ちう)ある毛同を見んとあれ姫君の

懐にふくみ出す絆浅之進ハ指(ゆび)にてちよいとつまみ浅
まんまと官簾(りんろう)の中へ入たりけるに程なく傍(かうら)にさ
寄たる二尺よりちがふ重(け)に包みたる奥中の
忍ばせた男ゝ百人ばかりありければ浅之
進急ぎ懸やんで此度ハ官簾の下を行きて入たる
ける某日ばかりをとらへて出しをる所に彼奥方ハ姫
君様御秘蔵にて寵けるとや兄ひけんいらぬに
探ず(ら)越(け)十文字にかき切て浅(?)ましく依り
なりかゝるかゝる人々あきれ君臣共御経所にいでて
と涙ながらに彼姫を一つ所にしとめの家へ帰したる

あくむざんのるかなくこれよりも又何國へ赴
くらんそハ次の巻に解分兔

風流志道軒傳巻之三終